

史學童觀抄

二篇
上

リ伊5

4051

6-3



伊5
4051
6-3

買山市川清流著
雪堤長谷川宗一畫

史學 武家童觀抄

從吾所好齋藏梓

史學童觀抄卷三

源氏正記

是月法皇諸公卿を會し平氏を討功を論す賴朝第一義仲第二とし
 義仲を伊豫守行家を備前守に除し並に院の昇殿を聽し平氏の
 五百餘邑を收め其百四十を義仲に賜ひ留て京師を衛ふにせし旭將軍
 と呼義仲山野に生長し舉止粗鄙衣冠に任じ京人々嗤笑せしる八月
 法皇京師主無を以天子を立んと議す時高倉帝の皇子二人叔五歳季
 四歳なり擇て之を立んと欲因て宣し義仲に問ぬ義仲意を以仁の王子の
 今年十七歳なりぬ北陸の宮に屬奏して曰君を立てるは重事鄙人敢
 て問する所非然ども辱答問を受敢て情を竭せらんや故三條の宮

史學童觀抄

卷三

平氏の專横を憤り陛下を幽厄に拔んと欲し身を鋒鏑に殞す天下
之を悲しむ臣の功を今日に樹るも亦其遺令を奉するなり今建立を議
して其胤に及ばざらんば人心何とか云んと法皇聽ゆ遂に寵姫の言を
納て季を立是を後鳥羽帝と申奉る法皇頗る義仲を厭ひぬ頼
朝を京師に召んと欲義仲憤懣す而して北兵糧之を四出鹵掠す法皇
之を患ゆ小時に平氏南海に在て屢山陽を侵す義仲に命じて之を討
む義仲京師を發し足利義清等を以て先鋒とす閏八月義清平氏と
水嶋に戦ふて敗死す義仲進で南海を攻んと欲す途に頼朝兵を遣り
且京師に入んとするを聞則引還る詔して之を止む肯せは頼朝使をして
奏せしめ曰平氏の侵所の諸邑宜しく盡く其故主に復す後臣等

之を利す後から平氏の降る者は宜く之を赦宥す後臣嚮く宥せ
らる故に今日有源平並立て同く王家を衛る古制然りと為朝廷之を
視る何ぞ彼此あらんやと法皇益意を頼朝に屬屢使をして之を召む
是に於て頼朝躬範頼義經をして關東の貢武を監し西上せしめ以て
義仲を誦る義仲之を拒んと欲し行家と法皇を軍に奉ぜんと謀る行
家素法皇の寵あるより密に之を奏す十一月屢詔して義仲に西征
を趣す義仲不可東兵を備るを以て鹵掠益甚し法皇幸臣平の知
康をして之を詰む知康善鼓を擊鼓判官と稱す義仲曰鼓判官及
て人撃ねんと欲るかと知康怒て還り報して曰義仲反形已に成請
之を討ん法皇之を聽す驟に叡山園城寺の僧兵を徵し知康を以て

之將とす義仲將士を會て言て曰我功有て罪無何ぞ遽に此に至
 我五萬の士馬を以て留て京師を衛る而て官給する所なる豪戸を
 剥すんは何を以生存せん彼鼓我を讒して此に至る我將を撃て之を
 破んとす諸臣之を諫光闕に詣て降るを勸む義仲怒て曰吾兵を起
 してより數十戰未だ所謂降なる者を知らばと遂に將士を令て曰
 吾今日死を決す汝が輩之を勉よと乃軍を分て七隊とて法住寺を圍
 知康牆より上り義仲を罵る義仲咄嗟之に赴く知康走り匿る北兵火を
 縱て之を索るに獲は遂に法皇を攝政の第に帝を閑院に奉て公卿
 以下知康に至るまで官爵を停免自ら院廐別當となる
院廐別當 凡別當者
監察為任無定職唯為上首監其車耳因史略に別當別當一職事之名也正名
 緒言に院司有御廐別當掌點檢院中馬牛蓋擬左右馬寮御監掌天下馬政
 義仲の妻の

父藤原基房徐之を閑諭す乃法皇を西洞院に徙自ら其官爵を

辭す元暦元年正月義仲を從四位下に叙し征夷大將軍に任ず

征夷大將軍 四夷を鎮むるの意なり武將の重職なり日本武尊東夷を征玉ひより此
 号有とも征夷將軍とい言は其後五十一代平城帝の御時又文屋の綿九を征夷

將軍に任 是より先行家平氏と室山に戦ひ敗れ還り遂に河内に據

て義仲を畔く義仲樋口無光を遣兵に將とて之を撃し頼朝八

州の將士に檄し西義仲を討んとす幾何無いて徵兵聚るに六萬乃

盡く之を範頼義經に委し令て曰木曾必我兵を宇治河に阻ん皆

善馬を具以て騎渡す所と頼朝二駿馬あり池月磨墨とて梶原

景時の子景季年少銳勇是より於て池月を得て先登せんと請頼朝

聽き乃磨墨を賜ふ諸將皆發す明日佐々木高綱來り謁す頼朝

之謂曰汝能我為宇治先登せん乎曰臣之能せん遂に池月と
出之を賜ふ高綱感喜拜舞して出頼朝呼返之戒て曰景季
等乞ふ而與へば汝之を記せ對て曰諾時大軍浮嶋原に陣す景季
磨墨を牽て高丘より衆を誇り示す已りて大嘶聲あり畠山重
忠曰池月の聲なり何を以て此に至るやと已りて高綱の僕池月を
牽て丘下を過景季問て曰誰が衆ぞ對て曰佐々木氏の衆なり景季大
愠て曰圖らざらば公の彼を視我を踰んとへ寧彼と死し公を二良を
喪はしめんと即刀を扣へ路を要して高綱を待高綱望見以為公の我
の屬す是が為なりと漸近く景季呼て曰彼衆公の賜ふ所乎高綱
晒て曰否吾善馬無を患ひ公廐に就て之を借んと欲る磨墨已り

子に賜ひ池月命を得ざると聞子且然り況て高綱に於てをや遂に
廐人を誘ひ之を竊めり後責問る有は子幸に救解せよと景季
色解笑て曰我竊まざるを悔と乃與俱に西に範頼勢多に向ひ義經
宇治に向ふ義仲之を聞戦守を議す見兵千騎乃今井兼平山木義
弘を遣て勢田に拒ぎ根井行親楯親忠に宇治を拒ぐは橋板を撤
柵を樹繩を水中に張て之を守る二十日義經二萬五千騎を以て東岸
に至り以て陣を布櫓を起て自登將士の功最を筆して將を以て鎌倉に
報せんとす將士皆奮て戦んと欲す義經又令を發する軍器殿に令
聞え以乃平等院の鼓を取櫓下之を過一軍皆耳を屬義經乃令曰
二萬人中必善酒者ありん直に前て之を嘗よ我勇士橋架は縁敵を

防敵の酒く者を射さむる勿れと酒者争て甲を釋て汝一力を以て水底の
 繩を截平山季重涉谷重助熊谷眞實等架よ上て射る射戦良久一
 二騎あり馬を鞭し流を乱し進む先なる者景季後なる者高綱なり高
 綱後より景季を結て曰子の馬條慢し景季馬を駐め條を約す高綱超
 乘て過岸よ上て自名の景季踵で上る畠山重忠手兵を以て繼渡し力を
 揮て進む北兵辟易義経乃全軍を以て渡撃て大之を破る行親搏戦
 して退く義仲使を馳法皇に醍醐寺に幸せんを請聽さば則兵を率ゐ
 馳て其宮よ赴き刀を抜目を瞋し階下よ立て輿を具し幸を趣す宮
 中股栗す會東軍己の木幡よ至ると来り告るあり義仲馳出五條第
 を過妻藤原氏に訣る久しと出に二士あり之を諫めて帳前よ自殺す義

仲乃出行親親忠よ遇兵を合す兵厘よ二百騎東軍を望見るは旗幟
 天の彌る義仲進て東軍を冒す重忠景季等累進皆潰義仲驅進
 て義経と遇義経數百騎を以衝撃し因て乱射す義仲大に敗れ創を
 被り残兵を以て西走す義経其兵よ之を追も重忠等と法皇の宮に詣門よ
 踵馬より下颺言して曰臣源頼朝の使者義経の賊を破て至る願くは為よ
 之を奏せよ大江業忠敬馬喜入て之を奏す法皇大に喜び以て六人を延て
 中門外よ刊立せしめ之を見る人を以て其名を問しめける赤錦袍を穿つ
 者は源義経緋甲の被大刀を帶る者は畠山重忠重忠よ亞く者二人法
 谷重助河越重頼玄甲の者は梶原景季黄甲の者は佐々木高綱法皇
 皆壯士なりと曰ひ勅して宮を護せしめ義仲既に敗れ法皇を挾て西奔

せん欲還て宮に至る義経等撃て之を卻く義仲走て三條磧に至る東
兵争て之を要撃す義仲且戦且走残兵僅に十三騎重忠復之を追義仲
の妾巴といふ無平の妹なり膂力あり毎に軍に從ふ是時單騎止り闘ふ
重忠之を生得せんと欲巴の甲袖を攫巴馬に策馬躍て袖絶義仲七騎を
以て走る會範頼勢多を破て入遠江内田家吉其先鋒あり巴之と搏
其首を斬て義仲は視ず義仲歎て曰家吉美しうて勇然も首を女子に
授く吾亦何人の手は死るを知因て巴は諭して遁れ去り曰死は臨すを
妾を攜は人我を何と謂ん巴共死せんを請義仲之を強ふ巴乃泣洩
しと辭去義仲走て粟津に至無平は遇互に敗状を語り義仲曰身
創力竭以て自殺す無平曰主公宜く逃れて北國に走り以て後

圖を為しぬ臣請此に留て敵を防ぐと乃旗を樹て潰兵を集む潰
兵稍聚て數百騎を得進で敵陣を衝貫て過る者三乃二十餘騎と
為る範頼數千騎を以て之を圍む義仲奮戦し盡く其騎を亡ふ獨
無平有無平乃一邱樹を指し義仲は謂て曰君彼に赴き徐に自計を
為しぬ臣此に拒ん義仲田に徑し邱に赴く馬淖に陥る願て無平を視
箭来て額に中て死す年三十一無平方に奮闘し箭八矢を餘す射て
八騎を斃す敵中木曾公死ると傳呼を聞曰吾事終と刀を啣馬より
墮自ら貫て死す東軍振旅す而無光方は行家を破て京師に還る
其兵道より七鳥羽に及比三十騎あり東兵赴撃兒玉黨之と姻あり
諭し降以て歸り死を宥せんを請朝議聽さる終に之を斬義経義仲

巴女家吉を斬り其首を木曾
公に視せし公嘆息し且巴女を
去し人言を如何と嗚呼巴女
の悲しき武勇絶倫其軍は後
に於て何れ有ん彼大湊の隘
を馳遊ば爾を如何の嘆を
爲し比すれば其其邁の氣
象を失せさるや遠く惜か
公も亦沐猴を脱れざる事
流亞たるを脱れざる事



料峭東風凍鐵鱗
冰肌濺血淚妝新
粟津有勝馬江處
從騎中猶着美人



以下の首を京師に傳ふ義仲の叔父義廣初一口は防ぐ兵敗れ伊勢に
逃れ後頼朝は攻殺さる義仲の子義高郷に鎌倉に質ち頼朝妻に
女を以てす後之を殺さんと欲義高覺て遁る追捕て斬る妻悲慟して
食せ居頼朝罪を追ふ者歸て之を斬り女を藤原の高保に改嫁せ
めんと欲す皆せ居て死す義仲の妾巴信濃に歸り髮を削て尼と為
時年二十八後越後の友松に居義仲の冥福を祈り以て身を終つ
平宗盛南海より山陽に徙山陽の將士平氏に服從し平氏終に福原
に復り城を築て據山を負海に臨み生田を東門と一の谷を西門とし
勝兵十萬餘大艦數千を繫ぐ而て平教経備前安藝淡路和泉に
轉戦し皆捷平氏の威関西に振ひ京師を犯さん期す頼朝之を聞

て二弟を趣し赴き伐しむ二月三日を以て一の谷を攻範頼五萬騎を以て
西門に向ふ土肥實平軍を監す義経丹波路を取無行暮比三草山に
至り平資盛等七千騎山西に陣すと聞即夜直に發す僕辨慶に命じ
火を沿道の民家に縱ち明を取て過ぐ夜半山西に至り急ぎ資盛を襲
資盛備へば大に敗走す天明田代信綱土肥實平をして七千騎を以て
西門に赴かめ自精騎三千を將めて城後の間道鶴越に向ふ日暮せ
軍を駐む熊谷直實平山季重麾下に在直實其子直家と殊功を立る
を欲し乃馳て一の谷の西門に赴く天未だ曙ば門は薄て自名て戦を挑む
季重亦踵至る敵門を闢く二人突入奮闘ふ城兵辟易す季重出て見れば
其旗卒を亡ふ乃復入其敵を斬て出實平信綱皆至り士卒を令りて繼

攻む門堅くして破れぬ範頼亦諸軍を令し東門に薄じむ武藏の人
 河原高直其弟と柵を踏て先登し箭の中て死す梶原景時輕卒に
 柵を抜しめ五百騎を以て入鬪し既に顧れば景秀敵中にて髪を被
 て鬪ひ箴に梅花を挿以て自標す景時識見て之を挈て出是時
 當て平氏専ら東西二門を防ぎ義経を圖らば義経鶴越に向ふ路
 險夜黒時辨慶火光を認て一人家を得たり翁姫對坐するを見告る
 故を以てす翁の曰小人獵を以て業と山路を諳知す而今老うる兒有
 膽氣用ふ能くと乃呼起し辨慶に従て義経に謁す火を執て之を視し
 長身高額獵弓矢を持其齒を問曰く十七と義経為し之に冠し姓
 名を就馬尾経春と命し鎧仗を給し以て郷導と為鶴越は如何と問

経春曰大險人馬行ゆかば唯鹿能之を踰と義経曰鹿四足馬も四足
 等きのみと衆を先て之に馳鶴越に至れば則天明城中を懸視は二門
 戦方々酣なり義経急に應せんと欲而懸崖數百仞八尺を經春が
 言所の如く衆相目敢て進者なり乃試し鞍馬二を驅之下す一は
 傷き一は達す義経曰下す能くは乃一鞭して下三千騎皆之に倣曹鞭
 相觸直に城後達し大に呼んで入平氏の軍駭き擾れ自相撃刺し
 教経等敗走す義経火を縱て之に乗す烟焰城に漲る範頼實平東
 西の門を破て入三面合撃し平通盛等十人を斬り平重衡を擒す宗盛
 乘輿を奉り海に航して逃る衆舟に攀乗を争ふ断臂舟に滿逐る
 讚岐に奔り田口成良之衆に倚屋嶋を保つ義経範頼首虜を以て

京師を還り徇て之を梟せんと請許さば義経抗疏して曰臣が父義朝
 忠を保元を盡す而人誑誤せられ卒に詔を獄門に宣平氏昨は戚
 勲たるも今は國賊たり臣等力を竭し攻討し進で死を顧ざるは
 獨王命を重んずるのまゝ父の恥を雪んを欲あり臣が兄頼朝深く此
 志を存す今之を許さんんは臣等復何の望所あるんと朝議乃之
 と許す三月頼朝義仲を平ら功を以て正四位下叙す梶原景時を
 重衡を鎌倉に搦致す頼朝面見す景時を命を將りて曰吾相國
 の徳を忘る非王命如何とも為難然れとも公の卒に此に臨んとは
 圖ざりき内大臣氏の若きに至る亦當ふ不日に見べと重衡速に
 死を請頼朝之を狩野氏に屬し二姫を侍せし酒食を饒る是月

土肥實平を令し山陽道を鎮撫す六月奏請して範頼を參河守に任じ
 從五位下叙す範頼鎌倉より來て謝す置酒之を勞す八月復西征せ
 る是月法皇義経を左衛門尉に任し檢非違使に補す九月頼朝
 範頼を以て西海の軍事を紡義経を南海の軍事を紡し範頼は
 先發せし三萬騎を以て山陽道より下る平行盛の兒嶋に軍するを聞
 赴き攻藤戸に陣し海を阻て敵を望む敵之を招き戦を挑む我兵渡る
 能はば佐々木盛綱潛り土人の津を問夜與俱濟り竹篠を植て標と
 て還り日敵復戦ひを挑む盛綱馬を躍せ濤を破り進む衆之に従ひ
 撃て行盛を走らせ進で周防に入是月義経從五位下叙し院の昇
 殿を聽する十月頼朝公文所を置

公文所
 公議して執行ふ所領等の政事の文書を納め
 置所此所後人會て事を評議し決断す也

大江廣元を別當と一以て政令を出す問注所を置問注所盜賊罪人等を亂明し紛失物を詮

議する三好康信を執事と為以て訟獄を決す將士の令して曰凡武門の

事悉く法皇の旨を奉ト便なる者あるは徐之を分疏せよ遂に

奏して曰方今天下半定れども貢賦闕乏請ふ國守を簡擇し流民を

撫輯し京畿控弦の士悉く義経に従ひ西平氏を討め其功ある者は

宜しく臣に附して論賞すべし僧徒の兵を帶する者宜しく臣に附して

禁止收取すと又關西諸族に檄し平氏を攻るを授けし文治元年

正月範賴赤間関に至る舟の濟す處き無し軍疲れ糧乏將士皆東歸

を思ふ範賴書を以て軍食を濟んを請ひ又曰杵氏に諭して戦艦を給

せむ水上氏糧食を餽る範賴三浦義澄を以て周防に居守せしめ諸

軍を以て海を濟る月を踰て賴朝の給する所の糧舶至る軍益振ふる原

田種直と葦屋浦に戦ひ大之を破る是より先義経數南海を征

せんを請ふ法皇京師賊多きを以て聽さば義経奏して曰日を曠りし

久を彌ふは範賴糧盡東歸せん而鎮西の兵士寢平氏に屬せは勢拔

難かんと乃之を許す二月義経京師を發し渡部に饑す東兵水戦に

習はる人々自危ふむ梶原景時曰く請ふ逆櫓を為らん義経曰く何

を逆櫓と云ふ曰舟艦皆櫓を設け進む舟を以て退し艦を以てす

舟艦此二字字音より舟を舟と一舟を舟と或は舟と反するものあり畢竟相通して舟と

見も本文の如きも此處も舟を舟と艦を艦ととすの如し然とも下の扇の的を植る條

とすの如し似たり義経曰進を求て退くは兵の通患なり何ぞ退を求るを

欲せん曰進む處より進退處にして退は良將なり進有て退く無は

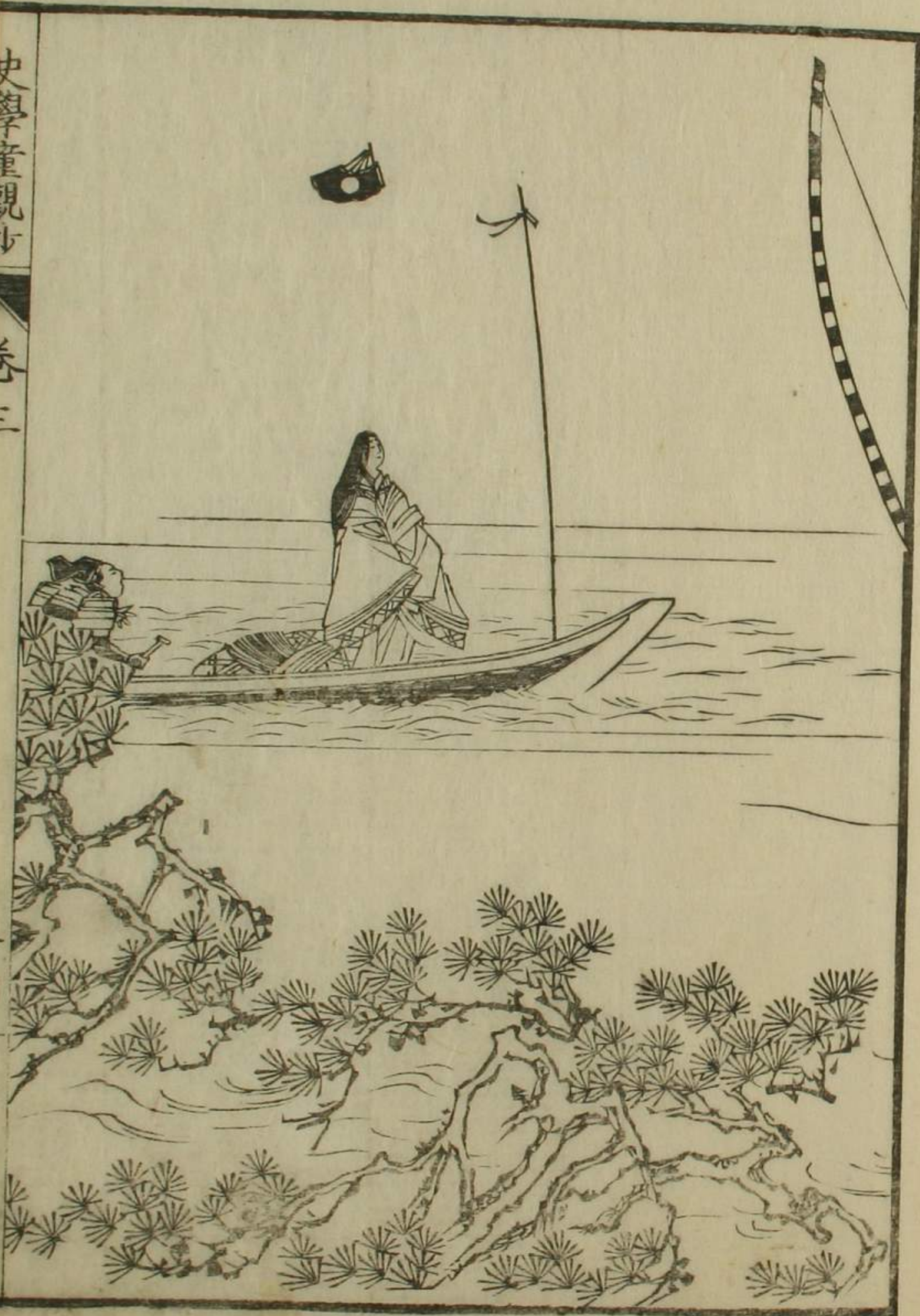
史記 卷三

野猪ヤチを介かいする者もののみと義経よしかげ色いろを変じて曰い猪ち鹿ろ吾われ自より知らん
唯ただ進すすを知して敵たけを勅つすを快さかと為するのみ公こう若もし大將たいしやう為ならば逆さか擧あげ千百
公こうの為ため所ところを聽きせ義経よしかげは於かては欲ほせざるなりと衆景しゆけい時ときを目笑めせうす景
時とき漸しだ志しす義経よしかげ令を出だして曰い進すすで死しせんとする者ものは我われも從まり退ひいて
生なんとする者ものは此こより去されと畠山はたけやま重忠しゆしゆ熊谷くまがや直實ちかみ金子かねこ家忠けあち佐々木
高綱たかづな等ら從まふを願ねがふ者もの數かず百人ひゃくにん將しやうの發はつせんとす逆風さかぜ俄たちに起たり舟艦ふねかん
壞こ破たす乃すなはち留とめて艦かんを修あり艦かん成なる即すなはち夜よ纜じやうを解とけし時ときは風かぜ及および益ますます暴はげ
舟ふね人ひと肯かんせは伊勢いせ義盛よしかげ弓ゆみを矢やを注命ちゆめいを用もちひざる者ものは射殺いげさんとす
舟人ふねひと相謂あひまひて曰い行ゆも死し止とも死し死しは一ひとの事ことと乃すなはち發はつす從まふ者もの五艦ごかん百五十
騎暗きあんを乗のり七南しちなん舟ふねの駛射ししやが如ごとし黎明れいめい尼子にこ浦うらは達たつし岸上かみづみを望のぞみ

赤せき幟しゆを翻ひり敵たけ三百さんひゃく騎きをかり有兵岸あつひのきの上うへて大戦たいせん敵將たけしやう田口良連たのくちらむらを擒と
す其捕虜そのとら言櫻間良遠うらやまらむら五十の兵へいを以もて勝浦城かつうらじやうを守義経よしかげ馳かり疾はや
攻せ之をを拔進はつしんで中山ちやんせんに至いたる一卒いつそつの書しよを齋いさ一行いっけいを見京人みやうひとなり義経よしかげ問とて
曰い子何なんの之をや曰い屋嶋やしまの息子むすこ齋いさ所ところは誰たれの書しよぞ曰い六條夫人ろくじやうふじんの書しよと夫人ふじんは
宗盛むねもりの妹いもうとなり子屢こゝろ屋嶋やしまに赴おもむき平へい曰い然しかり其城そのじやう甚固しんこと聞然きこるや否いな曰い
否いな潮来うしほ来きれば舟ふねを須もちふ潮去うしほれば騎渡きわたす也なり義経よしかげ乃すなはち叱して曰い吾われは九郎
なりと其書そのしよを奪うばひ卒そつを樹き縛はりて五十騎いそきを以もて疾馳しやくし明日屋嶋あしたやしまに至いたり
火ひを高松たかまつの里さとに縱たつ平氏大々へいしだいだい驚おどき以大兵おほひの至いたり一族いっさくを擧あげ舟ふねに
乗のり而しかち義経よしかげ城下じやうげに至いたり騎能屬きにぞく者もの七人しちにんの城兵じやうへい平有國へいゆうこくといふ者ものあり
呼よびて曰い大將たいしやうは誰たれと為なる伊勢いせ義盛よしかげ對たいて曰い九郎判官くわんなり曰い是義朝よしかげの

嬬子鐵買こてつ子從ま陸奥むつ如ごと一者ひと平義經へいぎぎ怒おこ城兵じやうへい嘲罵あざわら已ま金子家かね
 忠弟ちゆうてい近範ちかのりをし罵ののしる者ものを射殺やぶせしむ義經ぎぎ敵たか其寡單そのせうたんなるを知し
 れんを恐おそれ乃すなは火ひを縱たて城じやうを燒や平氏へいしの兵へい皆航みなか更さら來きて岸きに迫せま
 七騎しちき拒こぎ射や我兵わがへい後のちる者もの稍々しやうしやう來きり屬ぞくす又また州人しゅうじん藤原ふじわら範忠のりたかと云い者もの
 生兵なまへい數騎かずきを以もつて來きり曰い臣おん曾祖そうそ範明のりあき嘗あて八幡やちはん公こうに從まり陸奥むつ
 戰たたふ者と義經ぎぎ喜よろこび以もつて先鋒せんぽうとす戰たたて交退こくたいく日既ひに曉あ敵たか一舟いちしゆ
 美姬みぎを載の扇あふを竿かんに挿さて之を舳はに植陸たくを去さ五十步いそをわり塵ちりきき
 射やんを請よ義經ぎぎ曰い誰たれり之を命めい中ちゆうせん者ものを衆下野しゆうげのの人ひと那須なす宗高むねたかを薦すす
 義經ぎぎ乃すなは之を命めい宗高むねたか騎きして出で兩軍りやうぐん注視ちゆうしす宗高むねたか一發いちぱつ扇せん轂こくを折を
 扇あふ翻ひて隨ま兩軍りやうぐん大呼おほい平氏へいしの兵へい怒おこり來きり戰たたふ義經ぎぎ親擊おんげて之を卻しりぞ

追おて海うみに入い其執所しやくじよの弓ゆみを波上なみに遺あす俯うつて之を取とんとす敵兵たかへい爭あふて
 鐵搭てつたつを以もつて其曹そのせうに鈎かぎす義經ぎぎ刀やいばを以もつて之を打うき鞭むちを其弓そのゆみを扱とり從ま
 兵呼へいこて曰い之を舍する義經ぎぎ聽き終つひに之を取と還かへる從兵じゆうへい曰い君何きみなにを身みを輕かろ
 んとて弓ゆみを重おもんずるや曰い不ななり吾弓わがゆみを以もつて叔父おんぢふ鎮西ちんせい八郎はちらうの弓ゆみの如ごとく
 ならば則すなは可たなり否いなは是敵これたかに笑わらを貽おこすなりと宗盛むねたか教經のりたかを以もつて
 精兵せいへいを率しゆめ岸きに迫せまり義經ぎぎを射やさむ佐藤さとう嗣信すけのぶ身みを以もつて義經ぎぎを
 蔽おほひ斬きつる豎菊たてきく王舟おうふねより下くだり其首そのくびを斬きんと欲ほす嗣信すけのぶの弟忠信ちゆうしん射やて
 菊王きくおうを殺ころす兄あにを扶たす營えいに還かへる義經ぎぎ親おん嗣信すけのぶを視み之を膝ひざに枕まくらせしめ言いん
 と欲ほす所ところを問と嗣信すけのぶ曰い臣おん陸奥むつを出でりし已まに身みを君きみに委ます君きみに代かり
 死しは死しとも朽くせし獨君ひとりきみの敵たかを鏖あるを觀みざる憾うらみと為なす義經ぎぎ泣なりて曰い



古へより射の精なる者論すれば必ず射の甘んずる貫風由基が穿揚を擧ぐ然ども宗高を大將乃命を受て馬を兩軍に賜ふ際立ててを蟹眼に射るの扇を動揺らざる舟の上下射てあやまらざる神入てハ尤も射の和漢乃冠絶と謂べ

あつそちひきやんらん
扇はすくすく
風はあつそちひき

萬蹊



我敵を塵す旬日あり而汝が勞子醜ふ及はば嗣信謝て絶是日

鎌田光政亦箭を被て死す義経僧を請ひ先政嗣信を高松に葬り

贈する贈 正字通音奉密の助を致す也穀梁傳車馬を贈と云貨財はと云又白虎通贈は助之贈は赴なり生を助け死を送る所以なり今云香奩布施物などの事なり

名馬を以てす一軍感泣して皆義経の為に死せんを思ふ是夜西軍屋

嶋の故址に陣し東軍高松に陣す伊勢義盛獨徇警して明に徹す

明日義経最を侵し復屋嶋に赴く西兵善戦ふ然とも撃て之を破る

平氏走て志度浦を保つ義経追撃復之を破る又平氏の將田口成良

其子成直をして兵三千を以て伊豫に徇しもと聞義盛に命じて往説て

之を降し先義経其兵を并せ成直に書を作しめ成良を招く成良

終に款を送る平氏の舟志度を逃れて西す義経陸に徇て之を追ふ

東軍の風を阻ぐれ後發す者悉く來り屬軍益振ふ時三月廿二日

ちり宗盛鎮西に赴んと欲す範頼三萬騎を以て豊後軍す平氏

入船はば還て壇の浦に泊す兵艦凡五百艘熊野湛増河野通信皆

來て義経に附明日義経兵艦七百艘を以て大に海上に戦ふ西兵殊死

戦す我兵少く卻て義経衆を勵し進む和田義盛敵に迫り乱

射し殺傷甚多し義経成良の言を以て宗盛等の在所を知り軍

を麾て之に萃免成良をして内應なきは西軍大に敗る教経怒り

我船に入義経に薄る義経躍り別舟に入教経及ぶ船はば乃海に赴

死す知盛以下六人前後皆死す二位尼養和帝を懷き海に投す平大

后繼投す我兵搭て之を得義経大后以下を其船に奉じ遂に宗盛を

生擒一平氏の軍を虜す海水為一赤一四月東軍旅を振免俘獲を

以て旋り之を京師に徇へ鏡璽を還納す範頼留つて西海を鎮す六

閱月乃還る頼朝使二名を遣一西兵士の侵掠を禁し事大小と無

一は朝旨を奉りて行ふ將士其奏も因らば衛府官も拜する者は衛府

官左右近衛府左右衛門府左右兵衛府是を六衛府といふ衛八守るなり禁中を守護する義武勇有者をも衛府の官に任するなり

詔して頼朝を從二位に敘す五月宗盛父子を鎌倉に檻致し義経護送

す行て内海に至り入子に徒行して義朝の墳を七匝せめ六月鎌倉に

至是に於て頼朝大に諸將士を會し自ら籬内に坐し宗盛を前舎

に延比企駭員をして言ひ先て曰頼朝敢て私仇を復すも非乃王命を

成のま今日の臨何の華甚だ宗盛懾伏死を宥せしめんを請許さる

乃復護送て西還せし先之を篠原に斬首を京師に傳へ右獄に梟す

右獄京師を東西に分て東の方を左京といひ西の方を右京といふ右獄は即西の方にある獄舎をいふなり平重衡を南都に斬大納言

時忠を流し處す八月詔して義朝の墓に就て内大臣正二位を贈しむ

是月頼朝奏請して同姓五人を以東國の諸守に補せしむ特詔して

義経を伊豫守に任し院廐別當を兼京師を宿衛せしむ初頼朝征

西大將軍を擇し諸守の才を試んと欲し陰に盟器を烙て諸守を

て更るべし侍て之を執しゆるも皆執て輒驚き釋獨義経神色自若

たり頼朝是を以其事も堪るを知り心陰に之を畏る握原景時寵あ

りて義経の軍を監す義経與も事を諮し景時怒て範頼も屬白山

重忠初範頼も隸す景時を寵を負人を凌を憎去て義経も屬景時

益怒り寝之を頼朝に潜す頼朝性忌克平廣常源忠頼皆驕傲を以
 誅殺せざる義経亦功を負自専なるを聞稍之を惡景時又逆擡の議
 を争を相啣益甚しく鎌倉に歸り百方之を讒す頼朝一男を擧而其
 外舅北條時政を親信し諸骨肉皆猜防せざる義経東俘を鎌倉に
 獻し腰越驛に至る頼朝入を許さず時政を以て俘を受む義経乃書
 を大江廣元に寄て自訴て曰義経征討の勞に代り上國賊を夷げ下
 家恥を雪ぐ心竊し褒賞を期す圖ざりき忽讒言を蒙り日を此に空
 せんは以て自明む莫く徒ら涕泣すものと先人の再生するに非より誰
 う為の方疏せん義経幼くして孤母に從て逃匿諸國に流寓し未だ
 嘗て一日安居せ居然然而幸慶忽會し重任を委するに至る或は馬に

峻阪に策或は風を大海に凌ぎ敢て軀命を顧みず以て冤魂を慰し
 宿憤を伸んと欲豈他あらんや既に五位の尉を辱す榮顯何加ん而
 忽此厄に遭憂深悲切敢て誓書を上り之を百神に要す而して威
 猶霽せんば公の救護を仰がざるを得ば伏て願ふ間も兼し進説き
 庶幾は其他無を亮よせよ卒に恩宥せらば終身の安を享るを
 得んと報せに義経快々として西す頼朝其怨望を聞怒り其邑を奪
 時に行家京師に匿る義経潛に相往來す頼朝梶原景季を遣り
 義経に行家を討を命せし免且之を誦ふ義経病を称し目を問ふ乃
 景季を見景季及て其病羸の状を言景時曰兩日間寢食を廢し以
 病を装ふの事と頼朝乃諸將を召言て曰誰か我為し九郎を擊者ぞ

九郎我これ先さきて昇殿のぼり一我われ告つげて五位ごゐの尉さむらひと爲なる車服くるま華侈はら院中いんちゆうに
翱翔かうきゆうす饒君たうくん寵有ちゆうゆうとも何なんぞ自孫みづからせざる壇浦だんのうらの役やく太后たうたうと同舟どうしゆう一又平またへい
虜りよの女むすめを娶めとる横恣こわし此こゝの如ごとく誅鋤しゆそせざるを得えば誰たれぞ我われ爲なる九郎くわうらうを撃うつ
者ものぞと衆敢しゆうかんて谷やふる者無なく頼朝よりちゆう憚おそびす乃すなはち景時けいとき命めいす景時けいとき辭ことて
曰い判官はんくわん素臣すじんは惡あしく臣往しんかうは必かなら之なり備そなへん其意外そのいがいの者ものを遣まて之をを襲おそふ
若しばと乃すなはち昌俊ちやうしゆん命めいす昌俊ちやうしゆんは南都なんとの僧そうなり事ことに因より鎌倉かまくらにあり勇
策さくを以もつて親近しんきんせざる是こゝに計かゝて計かゝて授まかせ西にしへむ京師きやうしに至いたり義經ぎけいの
堀川ほりがわ第だを去さり四町よしみちに舎やを築たて義經ぎけい其その亟まに來謁きたりせざるを尤なるるを以もつて之を
詰つる對たいて曰い臣しん此行こゝろ七なな大寺だいじへ詣まづ七大寺だいじ
大和の國あり東大寺與福寺元興寺大安寺藥師寺西大寺法隆寺等也
事畢ことおひて後謁あとせんと欲ほくと義經ぎけい笑わらひて曰い否いな々々二位にの旨めいを以もつて我われを

圖ずに非あを得えんや吾われ今いま汝なを囚とむと欲ほく汝な兄あに氏の使者しや吾われ先さき發はすか
はと昌俊ちやうしゆん誓書せいしよを獻たまへ舎やに歸かへる義經ぎけいの妾靜めづかしと昌俊ちやうしゆんを闕あひ義
經ぎけい謂いわひて曰い彼かれが將まさに去さんとす時とき第中だいちゆうを四顧しよこんし目をめを麻あふと泣なく恐おそる
くは異志いし有ある義經ぎけい意いと爲なる夜既よな三鼓さんこ第外だいちがい大譟だいそうす第だに直ただす
者もの僅わずかに七人しちにん靜急じやうきゆうに甲かぶつを取とり義經ぎけいに被かす義經ぎけい令さして門かどを開ひらか
騎かして突出とつしゆつ昌俊ちやうしゆん兒こ玉黨たまとう六十餘むそじゆ騎かと散ちりて乱射らんせつす義經ぎけいの從士じゆうし變へんを
聞きて四至しよしす行家けいけ亦また來救きたりきうふ昌俊ちやうしゆん終つひに敗走ばいそうす義經ぎけい徑じやうちに法皇ほつわうの宮みや
に詣まづ昌俊箭や由よしに蠟ろう集じふす而しかして服ふくに有ある者もの三變さんへんを奏そうして還かへる昌俊ちやうしゆん鞍くら
馬山まさんに逃にぐる山僧さんそう義經ぎけいと故こあり索獲さくわくて之をを獻たまへ義經ぎけい其その誓ちか言げんを背そむく
を誚對しやうたい曰い臣しん者もの昌俊ちやうしゆん襲おそふ者もの二位に公こうと義經ぎけい怒おこりて其面そのおもてを毆うひて曰い我われ面おもて即すなはち

文治元年九月十七日
俊河乃第を襲撃す
時中兵士乃有
喜三太強弓を射
を射た敵を静
防を歌妓静
甲を揮て大
將の熟眠を
際す嗚呼此急遽
際雖當馬卒歌妓
其舉措をあやま
さるい戦世の風習
2出るも世の抑亦
強擲乃下み弱平無
の謂たるるの



宝刀跨海斬
鯨鯢具錦飯
郷忽斐萋阿
兄不識肥家
策枉煮同根
養牝雞



二位の面我面を毆是二位の面を毆なりと義経之を壯し活還じめん
 と欲昌俊速に死を請乃之を斬義経行家遂に迫り頼朝を討の宣旨
 を請公卿皆我経を憚權之を計を欲獨藤原兼實肯せば白頼
 朝罪未討す辱さす至るに且弟を命て兄を討之を如何と法皇遂に之を
 許ぬ頼朝之を聞て曰彼我使を殺す以伐辱さす乃諸將を戒束装
 して曰且日將を發んとす小山朝政以下五十餘人即夜將を發んとす乃以
 先鋒とし之を命て曰我未だ至るも及彼二兇を誅せよ後五日親鎌倉を
 發諸道に檄一軍を遣ふ會せよ義経之を聞法皇は詣關西の兵を
 勅して已を援んと請法皇之を許ぬ義経を九國の地頭行家を四國の
 地頭を補す十一月三日義経行家及女婿有綱等と俱に西海に奔竄し

往所を知ら頼朝黃瀬河に至り義経の既を奔を聞乃鎌倉に還朝廷
 宣して已を討するを以究を訴て已は法皇乃急に諸州に宣して義経を
 索て未だ獲は平氏餘黨又所在に竄匿す天下騷然たり頼朝之を
 患ふ大江廣元策を建て曰方今大乱初平關東帥府を倚安し帥府
 將軍の居所を以幕府を相同じ而奸豪諸道に伏匿し隨て起隨て討輒東兵を發則勞
 費量れば民誅求も苦今の計を為は國司に守護を置守護
 高五十分を領一國府を在て國司と相共率を執行國司は莊園に地頭を置國司の
 文章を以政務を執り守護の武備を以非常を証すの義に莊園に地頭を置國司の
 預るは郡縣を領す今世の除地を如き莊園と言此は地頭を置別兵糧を所在追捕す
 充課する是は其地頭人との義も亦後漢晉に地頭錢とあり是は是の稱なりか
 るも若は莫則天下坐て定むと頼朝大悅北條時政を遣京師を護
 衛せし因て之を奏請し且畿内及西南四道に課し段毎に五升を以て

兵食充んと請朝議之より従ふ頼朝家人の功勞ある者を薦て守護地頭と為し而身之を紛せ因て頼朝を稱し七十六國總追捕使と

總追捕使

守護地頭の上首にして總て日本國中に謀反人狼藉もの等ある時に弱る捕使といふ義なり

頼朝素無實の賢を聞

且其院宣を争しを徳とし之の書を貽て曰頼朝平賊の熾み當孤身

義を舉功を奏する至を得而敢て自專よせ今乱人乃命を扱柄を

恃敢て非分を規頼朝特に禍亂の端復是より起を恐近日奏請する

所以私を營ふ非乃天下の為に亂を定のと因て奏請して議奏官十

人を置公卿を撰て之を充公卿以下東討の宜に豫者を按治す二

年春無實遂に攝政と為北條時定時政に代て京師を護す行家

を和泉に有綱を大和に獲て之を斬十二月大野遠景を筑紫奉行と

行家義経の黨與鬼界嶋に竄すを聞撃つ之を平し是より先頼

朝奏し比年軍興民農に任さざるを以其管内九國通租を蠲き遂其正

税を薄し而諸國に準ず是歳亦倉を發相模の窮民を賑はす三年

春中原親能大江廣元等を遣閑院殿を修す時に輦下強盜多千葉

常胤下河邊行平を遣亂賊を鎮壓せしに入京師に至盜賊悉平し

四年六月六條殿を造る五年正月正二位に叙す二月大内を修す七月

奏請して陸奥藤原氏を討其義顯を舎すを以てなり義顯は即

義経籍を削り名を改め義経の京師を出るや舟に大物浦に上るに

颶に遇ふ颶は四方より吹風也行家と相失吉野に匿五日山僧群聚し之を

捕んとす佐藤忠信伴て義経と稱して亂射す義経間を得逃れて

多武峰に至り又十津川に徙り復還て京師に匿る忠信亦來て匿る
而て發覺し吏卒と鬪ひ終り自殺す義経乃妻河越氏及辨慶
等と道士装を為して北陸道より陸奥に奔る初義経妾静從つて
吉野に匿る義経之を諭して訣別す静風雪中を行山僧の爲に獲
られ北條時政に致す之を鎌倉に送る義経の所在を詰す静固く
知るを陣す其姓有を以て之を留む夫人政子其善歌舞するを
聞て見を欲す病を引て往て頼朝夫妻鶴岡祠に詣静を召舞を
命じ簾を垂て觀静固辭す之を強再三乃起て場の上藤祐經
鼓を搥畠山重忠銅拍子を擊静衣を整へて進離別の曲を唱ふ又
歌を作て義経を慕ふ意を以衆皆泣を垂頼朝色を變て

曰賤婢肯て我を頌せば而して亂人を慕ふと之を誅せんと欲す政子
諫止して纏頭を賜ふて之を罷祐經梶原景茂等と俱に静の舎に
就て飲す景茂は景時の季子なり酔て静を挑む静怒而泣曰く吾
嘗て豫州に侍す豫州は鎌倉公の親弟に非や汝乃公の家人何ぞ
吾を遇するの亡状なる公を以て友道を全うせしは汝我面を識んと
欲を得んやと景茂大に慚己よりて分身し男を生す安達清經命
を受奪ふて之を狀し静放ち還さる政子厚賜之を遣初頼朝藤原
秀衡義経を舎す奏して其亂人を納むを勅す院宣秀衡を讓秀
衡陳謝す尋て病卒子泰衡等遺言して二國を舉て義経を聽
以頼朝に抗す又院宣有て泰衡に義経を圖るに泰衡疑惑す

是年二月頼朝奏請王命を奉りて泰衡を伐因て大に徴す四月晦
泰衡兵を遣衣川を襲ふ辨慶経春等奮戦して死す義経妻子を
手刃して自殺す泰衡乃使を使へり義経の首を鎌倉に獻す六月
首至盛々漆函を以て一醇酒之を浸す義盛景時之を檢す或曰義
経死せず蝦夷に匿ると頼朝泰衡を伐んと欲し兵を徴し稍聚乃
大庭景能三善康信等をして留て鎌倉を守らめ兵を分て三軍と
爲し常陸下総の兵は東海道より進千葉常胤八田知家之將たり
武蔵上野の兵は北陸道より進む以企能貞字佐美實政之將たり頼
朝自中軍を將とて畠山重忠を先降とて東山道より直に陸奥より入
多古より次す次す

凡也師一宿を舍とのみ再宿を信とのみ信よ
すくもを次といふ止ること三日以上よりなり

月進で白河の関に至る泰衡鞭楯軍一而て厚檜山北に城を築兄
國衡をして精兵二萬を將とて之を守らむ國衡の將金剛秀綱數
千人を以て先鋒と爲り山下に大濠を穿遇隈河を引て之に瀦す
字書瀦は水の滯る所也即水瀦の事なり 頼朝重忠をして赴攻む卒を發して濠を填朝光
軍を挺て加藤景廉等と進て擊重忠繼進と大に之を破る秀綱退
て國衡は合す日既暮頼朝軍中より令り明日城を攻む三浦義村
葛西清重先登し數千人を斃す且日頼朝自ら進て攻城甚固く
國衡善拒り朝政朝光以下皆殊死戦し呼聲地を動らし積鏃堆
を成す朝光族朝綱と豫らめ死士七人を遣り城後より隙を冒し入
大に呼で射る城兵等大兵の來と擊を謂ひ大に亂る國衡圍を潰し

北走す和田義盛号を張之を追ふ國衡亦馬を回さし射義盛先づ
 發し其左膊に中國衡傷走る重忠の部將大串重親追て之を斬
 朝光亦追て秀綱を獲らる泰衡敗を聞て遁る頼朝進で國府に
 至る東海道の軍敵將佐藤元治以下十八輩を斬て來會す遂に
 諸軍を以て進連に栗原三迫の諸寨を破り平泉に至れば泰衡已
 二城を火て遁れ使を使はし降を乞許さる九月進で陣岡に軍す
 北陸の軍念珠の関を度り敵將田河行文等を斬て來り會す兵總に
 三十萬騎白旗空を蔽泰衡蝦夷に奔り贄の柵に至る其將河田
 二郎泰衡を襲殺し其首を以て來り降る頼朝之を謂て曰泰衡吾
 掌中に在何ぞ若かり力を須んや若恩を忘利を規る大逆無道と

乃之を斬命して泰衡の首を梟し進で厨川に至る泰衡の族俊衡以
 下悉く出降る頼朝鎌倉を出しより四十餘日ありて陸奥出羽を平
 げ乃其版籍を索るる皆兵燹に罹て失ふ橘實俊及其弟實昌
 なる者州事を諮るを聞召て之を見其記る所を圖せし免以て其
 戸口阮塞を知り流民を復し老人を賚ひ俘囚を放ち鹵掠を禁じ
 糧を上野下野に取て毫も土人を累さざり乃國府に至り其廳に大
 書して曰國法一切秀衡の舊より仍更革を得勿と葛西清重を以て
 留て州事を釐し免使を使はし捷を奏し且其擅伐を謝せし免
 將士の功を簿上し請て二州の地を分ち予へ十月鎌倉に還る十月
 法皇其戦功を賞せんと欲しぬ大江廣元を遣之を辭し請て陸奥の

建久元年十月

賴朝上洛

堂堂霸氣在東海
蛭嶋深潛千尺龍
際會風雲豈無日
果然一舉拂芙蓉

畏堂

賴朝上洛あり一時駿州
鞠子川より急小梶原を
召れける也景時一策
を加えきとせされハ川
水を馬の躑あけて公
から々れを御氣色あり
しは鞍はけは低頭して



鞠子川ければ

浪をなるとりる

公岸へ打上りたまふ時
馬の頭を引向て

かまあらん
人や見らん

とありて
氣色をな
りしれける
時と取て
の名誉な
りし



窮民を賑貸す十二月法皇頼朝を封する伊豆相模を以て京師の朝するを促け是より先泰衡の舊臣大河無任出羽に在り數千人を聚免詎て源義経木曾義高と稱し建久元年正月轉して陸奥より由利維平逆戦て之を死す清重変を上る使者謬報して曰由利維平走り橋公成死すと頼朝曰維平は走る者非ず公成は死る者非ずと之を檢する果と然乃上總介足利義兼千葉常胤以企能員等をして兵を將と之を伐む小山朝光以下陸奥より邑する者道より之を會し相模以西兵を具し命を待脅從降者を斬ること勿れと二月義無等無任と栗原より戦ひ大之を敗る無任卻て衣川に阻て陣す義無等流を乱して又大之を敗る清重州兵を率

來り會す無任逃て外濱より之を兜味山に壘す義無等圍て之を鑿す無任脱走し龜山を踰り樵夫の爲に斧殺せらる頼朝出羽の留守の政を失するを責甲二百を罰す今世より過料にて即甲二百を出さし先づなん頼朝天下全く定るを以て乃入朝を議す重忠を前隊と常胤之殿し十月鎌倉を發し海道より入朝す途内海を過義朝の墓に謁し青塚に至り女延壽を召す相見て舊故を道十一月京師より六波羅に居先法皇に謁し即日帝に朝す帝直に權大納言を授け右近衛の大将を無法皇厚く之を待しぬひ入見毎に刺を移し出るを許しぬは十二月兩職を辭す大功田百町を賜ふ功臣十人を薦免衛府官に拜し藤原高敏をして六波羅に留守せし免辭し鎌倉に歸る凡往還需る所

百姓を累さる遠近悦服す二年正月公文所を改免政所と稱す凡そ

事政所の下一文を以て行ふ政所下文下文は政所より昏き下す状なり文言の始と終り下すと又字を書き下し文より也

後世より御朱印二月法住寺殿を修す冬法皇弗豫あせめら頼朝

齋戒禱祈す三年三月遂に崩トゆ頼朝因て大に法會を張浴を

民に施す一百日七月詔して頼朝を以て征夷大將軍と為す中原

景能をして就て之を拜せし四年正月將士の座次を定む四月那須野

獵す五月大に富士野に獵す長子頼家従ふ獵罷て將を還んとす

伊東祐成者身時致と夜に藤祐経の舎に入斫て之を殺す蓋父仇を

復するなり士卒出鬪死者多し遂に祐成を斬る時致幕を犯し捕へ

らる且日頼朝親之を詰り問て曰何ぞ我幕を犯せし曰吾祖祐親

將軍之を仇とす吾仇祐経將軍之を寵す吾是を以て怨と頼朝

之を壯とし其死を宥せんを思ふ祐経の子の哀訴より乃斬る

處す二狐の変鎌倉訛傳し頼朝害を遭と夫人駭悲す範頼曰之を

安せよ範頼在と頼朝聞て之を惡む範頼大に懼れ誓書を獻ト

大江廣元は就て失言を謝す頼朝其誓書を源範頼と署すを見

て曰姓を稱するは濫なりと使者之を辯す釋さる頼朝夜床下し人の

氣息有を聞急し衛士を呼結城朝光床を發し一人を獲乃範頼

の力臣當麻也曰臣參州の憂迫を視幕中の議を聞んと欲るのこ

と之を掠治する異辭無し八月遂に狩野氏に命ト範頼を伊豆の

修禪寺に拘ふ其群臣相聚る濱館に據る兵を遣りて之を夷く

梶原景時範賴を殺を勸免其手兵五百を以て之を襲ふ範賴射
 十餘人を殪一火を縱て自殺せ五年八月安田義定亦殺其反を
 告る者有依てあり六年三月頼朝政子頼家と南都に赴き東大
 寺を落す寺嘗て平氏に焼夷せられたるを法皇之を修め頼朝為
 其資を給僧文覺をして役を司りむ慶する馬千匹を以てす
 馬千匹後世より馬代りて其實八金を以て之を折する遂に京師に朝一月を踰て歸る時平賀
 義信武藏の地頭と為百姓之を便とす頼朝其廳に掲て曰凡國に
 守る者當義信を則とす遂と八月東國の地頭を令一奸盜を
 匿す者有は皆其職を奪以て捕獲の者予ふ七年六月平賀
 忠兵を京師に聚免頼朝の妹夫藤原能保を襲はんを謀る能保

後藤基清を遣て知忠を攻殺す平氏の餘黨是に於て悉く平
 八年十二月頼家從五位上叙一右近衛權少將と為る九年十二月
 稻毛重成相摸川橋を修す頼朝親臨て之を落す歸途馬より
 隨疾作り明年正月遂に薨ず年五十三正治元年詔て頼家を
 以て右近衛權中將と為一天下守護地頭を總む頼家年十八
 北條時政外祖を以て政を執頼家を以て訟を聽る後其押臣五人と
 游處寢淫縱母政子驟之を戒む悛を以て時政聞知ざるが如く頼家
 弟あり千幡と云頼朝嘗て之を小山朝光等と囑して遺託す之を
 以て梶原景時朝光を頼家と讒す朝光之を聞て自ら危之計を
 三浦義村と問乃和田義盛安達盛長以下六十六人と俱に景時を

罪状一 大江廣元^{あはせひろもと}就^{つひ}て上^{あたま}る頼家^{よりき}其^{その}疏^{そと}を以^{もつて}て景時^{かげとき}示^{しめ}す景時^{かげとき}其^{その}邑^{むら}一^{いつ}宮^{みや}を奔^{はな}る何^{なに}なくして潜^{ひそ}く鎌倉^{かまくら}を還^{かへ}る頼家^{よりき}義盛^{よしのり}等^らを以^{もつて}て之^{これ}を逐^おつ其^{その}第^{だいいち}を毀^{こわ}つ景時^{かげとき}邑^{むら}を據^よる武田^{たけだ}有義^{ありよし}を擁^{たも}つ將軍^{しやうぐん}と爲^なんと欲^ほく京師^{きやうし}に至^{いた}り關西^{くわんせい}の兵^{へい}を舉^あぐんと約^{やく}し二年^{にふたとし}正月^{しげつ}景時^{かげとき}舉^あぐ族^{しゆ}西^{せい}奔^{はな}る頼家^{よりき}兵^{へい}を遣^やり之^{これ}を追^おふ景時^{かげとき}狐崎^{こさき}に至^{いた}り土豪^{とごう}吉香^{きちかう}某^{ある}を麿^あぐ殺^{ころ}せしむる衆^{しゆ}之^{これ}を快^たとす景時^{かげとき}頼朝^{よりちやう}の世^よを終^おつ信寵^{しんちゆう}表^{あらわ}へば建久^{けんきう}中^{ちゆう}熊谷^{くまがや}直實^{ちかみ}又^{また}下^{くだ}直光^{ちかみつ}と疆^{まが}を争^まつて訟^{しやう}ふ直實^{ちかみ}口^{くち}訥^{ねつ}辯^{べん}ず能^{あた}はば怒^おつて曰^いく景時^{かげとき}直光^{ちかみつ}又^{また}黨^{たう}す臣望^{しんぼう}所^{ところ}無^なくと走^はり出^いる刀^{やいば}を抜^ひき髮^{かみ}を断^たぐ西京師^{さいきやうし}を奔^{はな}る義盛^{よしのり}疾^{はや}あり景時^{かげとき}其^{その}士^し所^{ところ}の別當^{べつたう}を借^かつて遂^{つい}に還^{かへ}る是^{こゝ}に至^{いた}る義盛^{よしのり}乃^{すなは}ち職^{しやく}を復^{かへ}するを得^えたり建仁^{けんにん}元年^{げんねん}正月^{しげつ}越後^{えちご}人^{ひと}城^{しろ}長茂^{ながしげ}亂^{らん}を京師^{きやうし}に作^なす

小山朝政^{こやまのちやうせい}の第^{だいいち}を襲^おふ朝政^{ちやうせい}時^{とき}幸^{あつ}ふ從^まつて在^ある其^{その}兵^{へい}拒^かつて之^{これ}を卻^{かへ}く賊^{ぞく}上皇^{じやうわう}の宮^{みや}を圍^{かこ}み頼家^{よりき}を討^うつ宣^{せん}を請^こひ奔^{はな}つて吉野^{きちの}に匿^{かく}る頼家^{よりき}令^{めい}を下^{くだ}つて急^{いそ}ぐ索^{さく}し二月^{にふたつき}獲^とつて之^{これ}を誅^{ちゆう}す長茂^{ながしげ}姪^{めい}資盛^{すけみ}鳥坂^{とりさか}城^{しろ}を據^よる又^{また}頼家^{よりき}佐^{たす}け木盛^{きせい}綱^{つな}命^{めい}を伐^きつ盛綱^{せいづな}適^{あた}て門外^{かどぐわい}に在^ある命^{めい}至^{いた}るて家^{いへ}に入^いり發^はつて二日^{ふたひ}鳥坂^{とりさか}に至^{いた}る其^{その}子^こ盛季^{せいき}先^ま登^{のぼ}る資盛^{すけみ}逃^にぐす其^{その}姑^こを板額^{いたんがく}といふ板額^{いたんがく}名江嶋姫といふ色黒く頼朝の三つ子廣く醜はては多力善射^やる遂^{つい}に虜^ろせられ送^{おく}つ鎌倉^{かまくら}に到^{いた}る淺利^{あさし}義遠^{よしのと}之^{これ}を娶^めんを請^こみ頼家^{よりき}其^{その}意^いを問^とふ對^{たい}して曰^いく勇士^{ゆうし}を生^うみ免^まはして君^{きみ}に益^{えき}せんを欲^ほく頼家^{よりき}笑^{わら}ふ之^{これ}を聽^きく頼家^{よりき}累^{かさね}遷^{せん}是^{こゝ}に歳^{とし}七月^{しちがつ}終^{つひ}る征夷^{せいゐ}大將軍^{たいしやうぐん}を襲^おふ從^まつて二位^{にふたゐ}に叙^よぐ五月^{ごがつ}叔父^{しやくふ}全成^{せんじやう}阿野^{あの}に在^ある又^{また}を謀^まつと告^つる者^{もの}有^ある武田^{たけだ}信光^{しんかう}を捕^とりぬ

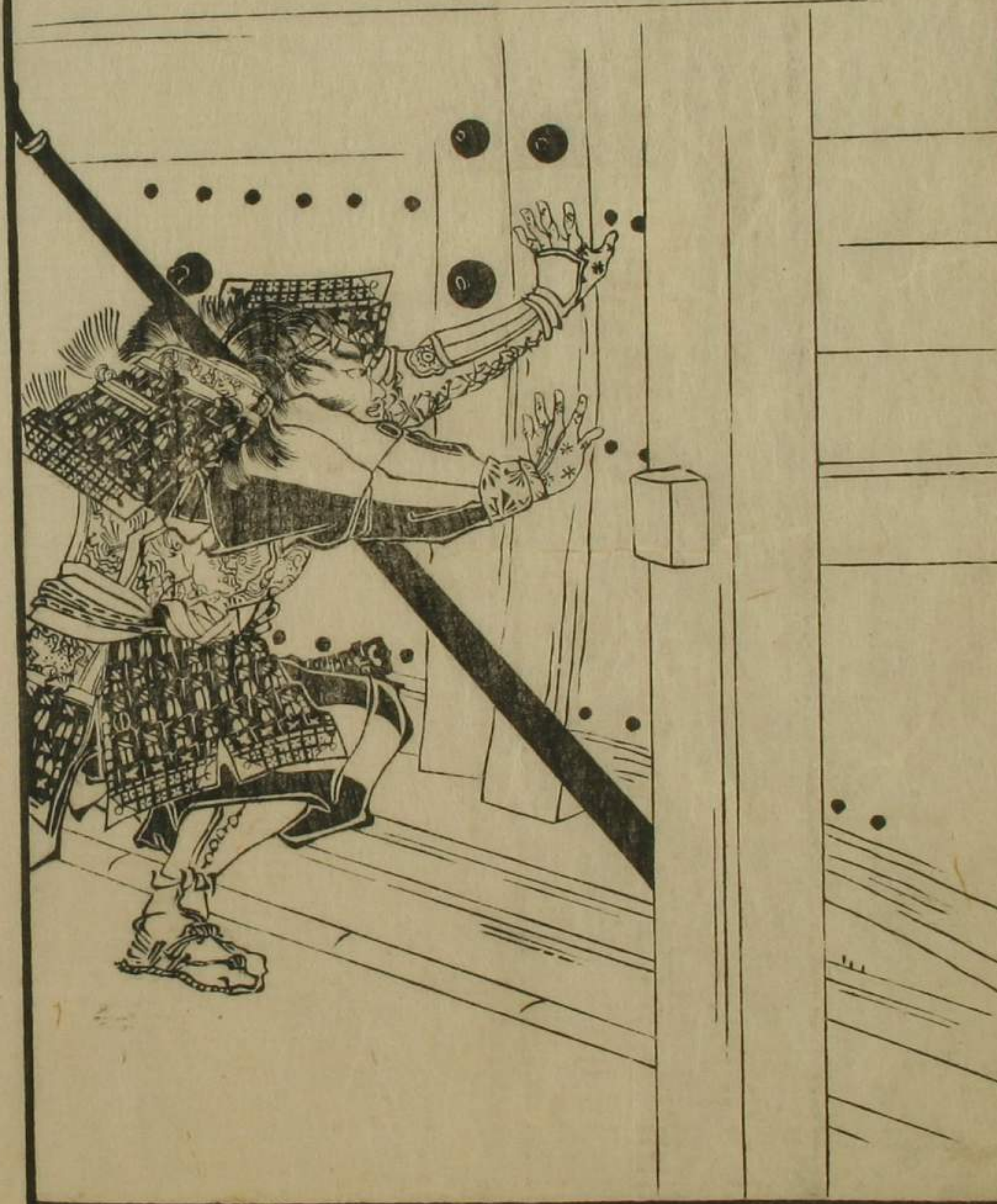
之を常陸に放ち尋て八田知家命之を殺す也是時當つて幕政
 大小と無く皆時政に決す其族黨一府に半す頼家制を受て心平
 なる能はば八月頼家疾あり政子時政と議一總守護を其長子一
 幡に傳へ關西三十八州の地頭を割て千幡に予へむ一幡の外祖以企
 能員其女に因て頼家謂て曰近日の議權を分争を起不便焉
 大なるは無と頼家亦北條氏の為所を憤り密に能員を卧内
 召與に事を計る政子耳を障外に側て之を聞人を馳て時政に告
 む時政其黨と之を謀甲を伏事に託して能員を召能員往甲起りて
 之を殺す從者走り歸り其子宗員告宗員族を舉一幡を奉とて
 小御所に據時政長子義時を遣諸將を率お之を攻宗員等奮

擊して之を卻く島山重忠兵を遣疾攻宗員力盡第を焚自殺して遂
 に悉く其族を夷げ并に一幡を殺し諸能員と親善なる者皆誅
 竄せしむ頼家病間変を聞大に恨怒す時政罪を仁田忠常に歸
 して之を殺忠常は能員を刃する者なり既して宣言頼家忠常
 と己を圖ると遂に頼家に迫り髪を削り之を修善寺に幽し千幡
 を以て之に代頼家幽囚無慘明年七月時政人を遣て之を殺す年
 二十三子一幡先卒す猶二子あり長なる者四歳政子千幡を以て之を
 養はば免遂に僧とて公曉といふ次なる者千壽丸といふ中務丞某に
 養はば千幡十二歳ありて立詔して從五位下叙し征夷大將軍を襲
 ひ名を實朝と賜ふ實朝北條氏の第に居令を下して諸將を安撫し

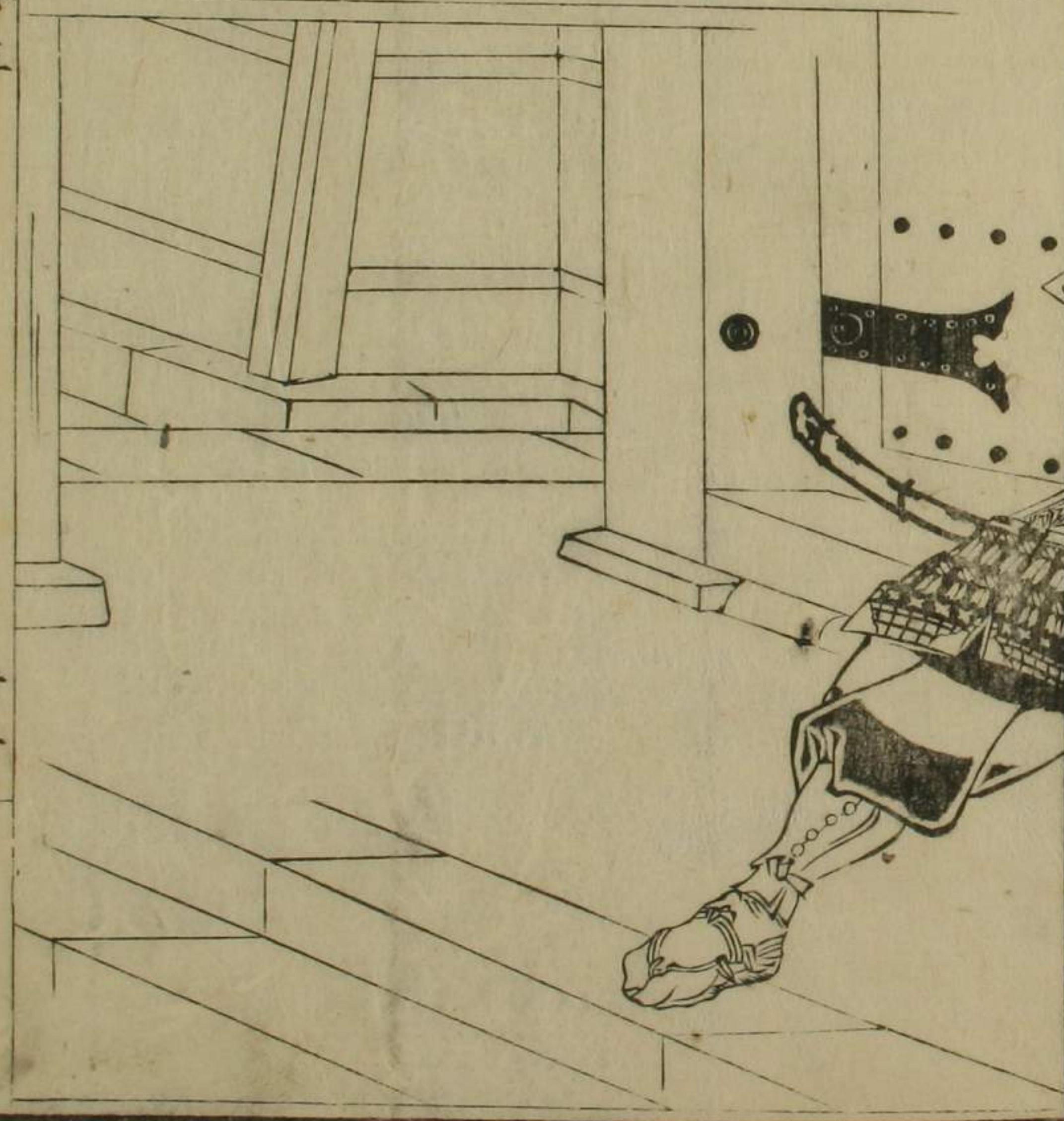
誓を京畿西國の將士に徵す武藏守平賀朝雅を遣り關西乃
 地頭を率ゐ京師を監護す元久元年三月伊賀伊勢に盜起る伊
 賀の守護首藤経俊逃走る實朝朝雅をして之を討し兎盜魁平
 基度平盛時を獲たり乃経俊の職を奪ひ朝雅に授く朝雅は義
 信の子なり畠山重忠と皆時政の女を娶る而して朝雅の娶る所は
 其後妻牧氏に由り故を以て時政偏に朝雅を愛し寢重忠を惡
 終に之を殺んを欲し反を謀ると誣二子義時時房をして重忠の子
 重保を其弟に攻殺しむ重忠其邑に在時政人を遣り給き告鎌倉
 難あり赴き援く應と重忠即百餘騎を從へ而發中途大兵の野を
 蔽ひ來を望見始て其實を知部下皆其邑に據兵を聚んを勸む

肯せはて曰吾梶原景時の苟免て讒を貽すは是ざる也と乃奮戰
 一箭に中て死重忠の族稻毛重成榛谷重朝等同日皆斬る北條氏
 重忠を忌日久し重忠勇みて衆あり頼朝に從て常に軍鋒をり而
 性忠厚人と功を争はずは頼朝深く其長者たるを知後事を委託す而
 して北條氏に陷るる天下之を寃とす七月畠山氏の邑を分て將士に賞は
 實朝時政の弟に在時政終に之を弑し朝雅を立んを謀り因て兵を
 聚む事覺る閏月政子諸將を遣實朝を義時の宅に遷す兵皆從
 歸る義時終に時政夫妻を北條の里に徙し京師の將士をして朝雅を
 誅せし是時に當て諸豪傑千葉常胤土肥實平等皆老死し
 佐々木高綱熊谷直實前後逃隱し獨北條氏專幕府の事を掌る

結來門を
 排し大
 勇力をあ
 らはせし
 者我義
 秀あり彼
 漢樊噲有
 のと蓋し人
 彼の轅門中
 乃一之を
 守の兵を
 固とすを
 敵とすを
 者あり
 義秀の如
 は然に排
 魏然たるは



幕府の大
 門あり之
 を衛する
 軍皆我敵
 なり是を
 由て之を
 観れば其
 湖なるを
 肇湖曰孟
 がら牛角
 烏獲す千
 乃移す如
 其將略の
 れざるの
 を用ひる
 と我義を
 亦之を謂ふ



實朝性文章を好む文章博士源仲章を師と和歌を中納言藤原
 定家と學而して武技頼家と及ばば然ども人と為優柔將士と愛
 せらる初年將士をして各頼朝下す所の文書を獻せ先雨時授る所
 の地頭職を禡はば頼朝頼家の世より數守護地頭の吏務に干
 與分外を侵取するを禁す是に至て又其下文を徵恩勲の殊
 を辨結番追捕せむ使者を遣管内を行き吏民の冤枉を問ふ然
 とも政權義時在實朝日夜文士と飲宴歌詠沈溺外事
 を問ば義時益專なり建保元年信濃人泉親衡故頼家の子千壽
 丸を奉兵を起して義時を討諸將應ず者多義盛の二子義
 直義重姪胤長等與す義時兵を遣て親衡を執ふ親衡の姓源

經基の子満快の遠孫なり勇刀あり吏卒數十人を殺して逃る千壽髪
 を削て京師に匿る義直等虜に就是時義盛上總に在馳歸り面
 謁二子を購んを請よ聽さる義盛大に喜で出且日大江廣元因て
 胤長を赦めんを請義時素より其強宗を忌より激して之を除
 んと欲一家臣金窪行親安藤忠家命胤長を縛義盛の前
 を過て之を吏に屬陸奥に放つ義盛慚忿門を塞て出ば義盛又
 胤長の第を實朝に請ひ人を遣て守るむ義時請て之を奪ひ守
 者を逐ひ行親忠家割與ふ義盛大に怒り遂に北條氏を滅んと
 欲日夜宗黨を會之を謀る謀泄幕府の使者來て之を問ふ
 義盛陳謝す使者徹其子弟の兵仗を閱するを見還報す令て

兵を徵更めいせいに使者を遣つし之を誚せむ義盛乃對たがひて曰いわ老夫故將軍の殊恩を受豈敢て又を謀んや獨兒輩義時の專恣を憤り往て状を問んと欲す老夫之を諭ども聽きざるなりと遂つひに百五十騎を以て分て三隊とす義時廣元の第を攻而して急きに幕府に赴おもむき實朝を取んと欲す其族三浦義村弟胤義と約して北門を守る而意中變へんし走まはりて義時告つぐ義時廣元と北門より入義盛隨まて之を圍む三子朝夷名義秀門を排はいて入向ふ所皆破足利義氏と遇其甲袖を攫つか義氏馬を鞭むちし濠を踰袖断義秀土屋義清古郡保忠と俱ともに奮撃す一府中皆辟易す火を縱はつ者あり烟焰天に滿義時廣元實朝を挾さ之を法華堂に避接戦一晝夜黎明義盛兵疲退ひく

前濱に軍す横山時無舉族來り援るたする會あひ三千騎を得軍復振たふ近國の兵變を聞て來り聚る義時之を召よひ疑うて至いたり實朝の啟書を請こめて之を示すまり乃至既なりて義直戰死す義盛泣而氣沮し終つひに江戸能範のりに射殺せしむ七子皆死す義秀五十人を以て海に航しなりて逃る義時和田氏の邑を分ち以て將士に賞す二年六月旱す實朝齋戒し経を誦す既なりて雨降る東國の租税を減す十二月義盛の遺臣千壽を奉たりて兵を京師に聚む事覺る大江氏卒しる之を攻殺す實朝已に累正二位に叙し權中納言に任ず六年累遷權大納言に至三月右近衛の大將を無大江廣元從容言て曰將軍慶ゆを來裔しに貽たんと欲せば宜よろしく滿盈を戒しる一盞を諸官を辭し獨征夷

將軍を帶び高年及び然後大將を求めはざる實朝曰吾卿の言
 所を悦ぶるも非然ども吾念も源氏の正統今日縮す吾飽
 官職を取家聲を舉んと欲す子孫を慮も暇あはざるなりと廣元
 言無し退く是より先宋の佛工陳和卿来て大和に在實朝召て
 之を見る和卿自稱す實朝の前生を知と實朝遂に宋に如んと欲
 命して巨船を造る既成て用べし是歲北條氏故頼家の子
 公曉を召京師より至る用て鶴岡別當に補す公曉常は父の幽死を憤
 里實朝を父仇と謂ひ竊に報復を謀り鶴岡の祠に祈る者十日十月
 實朝内大臣に任ず十二月右大臣に進む承久元年正月鶴岡の祠に
 拜賀す二十七日戌時をとり將に出んとす廣元進を謁して曰く臣

平生未だ嘗て涙出ば今故無して汝然たり臣甚だ危疑す先將軍
 東大寺を落す哀甲して自備ふ君宜之に倣ふ源仲章曰大臣
 大將甲を哀す辱らばと廣元又晝日禮を行んと請仲章曰燭を秉
 故事なり實朝出るに臨て秦公氏をして髮を梳せし髮一縷を抜
 之に與晒て曰吾遺物なりと公卿以下悉く従ふ隨兵千騎義時侍
 劍を持祠門に入比病作ると稱し劍を仲章に授而歸る實朝乃隨
 兵を屏け獨仲章従ふ儀畢公卿を揖し階を降る一人あり階側より
 跳出刀を揮ひ實朝及仲章を斬其首を持逃れ去時將は闇黒内外
 騷擾何人の為所を知らば而して大呼者あり曰吾は公曉なり父仇を
 報すと衆始て公曉の為所を知之を圍む公曉實朝の首を提直し

備中阿闍梨の宅に赴く阿闍梨天台真言にあり官には非有職の僧之蓋梵語なり以て食す夕舟

手首を釋は三浦義村の少子公曉の弟子たるより公曉使を使し

計を義村に問ふ義村給て曰將に兵を以て迎んとすと而て義時よ

告ぐ義時命じて速に之を殺さむ義村乃長尾定景を遣る力士

五人を率為之に赴く公曉迎兵の遅より自祠後の高阜を踰義村

の家より如く途に五人に遇て奮闘す定景傍より其首を斬て義時よ

送る公曉年十九實朝年二十八明日實朝を葬るよ首を得ば遺す

所の一髪を以て之に代源氏正紗此に於て絶



史學童觀抄卷三終

